

大正の米騒動

その『毎日新聞』（昭和四二・八・六）の日曜版は富山の歴史について書いている。大正七年、発端 全国に嵐のように吹き荒れた米騒動の歴史が、富山の一漁村の主婦たちで点火されたその日のできごとを想起している。名文である。以下その文章を借りて大正の米騒動の発端をみることにしよう。

大正七年（一九一八）の夏はめつぼう暑かった。白岩川が日本海へ流れ込むあたり、富山の水郷、中新川郡西水橋町のオッカたちはいらいらしている。北海道や樺太で働く夫や子のことが気にかかる。不景気とかで送金もとだえた。汽車賃もなくて帰れぬというたよりさえきている。ところが、米は天井知らずの値上がり続き。一升（一・五キロ）せいぜい二十銭だったのが、四十銭にもなった。売葉の袋張りや風船づくりの内職に一日精を出し「よいと巻け」までしたが、それでも日当では一升の米も買えぬ。年寄りや赤ん坊を飢死でもさせようものなら、オットに顔向けできようか。

八月三日午後七時。白熱の太陽があけに染まり、鉛色の海に沈み始めた。波が騒ぐ。漁師町の道々にオッカが立った。

「出てこいやあ、かけあいに行くから」

腰巻をけり出して、オッカたちが飛出す。薄暗い海岸に、たちまち二百人近くが集まった。一隊は大地主、石金長四郎邸へ、別の隊は浜の有力者宅へ、そして残る一隊は米問屋へと押しかける。

「だんなはん、あした食べる米買うぜニもなくてどうして生きていくがいね」
土下座して声をからす。木戸はビタリ閉ざされたまま。

「だんなはんらちや米を北海道へ売ってもうけとるもんだから上がるんやちや」

木戸をたたく。小石が飛ぶ。米を他県へ移出するな、町民に安く売れ、聞かねば家を焼き払う……。怒声はすごみを加えるばかり。滑川署東水橋警部補派出所の警官全員が駆けつけ、オッカたちとつかみ合い。午後十時過ぎ、オッカの本隊はけが人をかばいながらようやく引揚げる。張番組は米蔵の前にたむろし、一俵たりとも出荷させまいと徹夜でがんばった。下新川魚津町での七月二十三日の井戸端会議に端を発した米騒動は、こうして新段階にはいった。

富山県は米どころ、越中米の産地である。明治以来、この地方の米は秋田、山形に次いで安かった。たくさんとれるうえに、交通が不便だったからだ。米肥商は、北海道から仕入れた魚肥を売り、集めた米を逆送して巨利を占めてきた。

第一次大戦のもたらした好況。大正成金が宴会帰りに百円札に火をつけ、はきものをさがさせた話も都会から伝わる。一方では米価が狂騰。大正四年（一九一五）米価調節の勅令公布、米価調節調査会設置と、数々の対策が打出されたが押えきれない。七年七月、急騰のため各取引所は一時立会停止。八月二日のシベリア出兵宣言は騰勢に油を注ぎ、さきを見越した米問屋が買占める。沖に

汽船がくるたびに米価が上がる、とオッカたちは直感していた。

四日、騒ぎは東水橋町に移る。夕暮れとともに女子供約八百人が海岸に集合。米肥商に深夜まで波状攻撃をかけた。五日朝も二百余人が汽船や貨車を警戒、小ぜり合いで数人が逮捕される。

さらに東・西水橋のオッカたちは「米の移出反対」と墨書した白旗を押し立て、五キロの道を滑川町に繰り込んだ。地元の女仲仕やオッカたちも続々合流して総勢二千人。北海道通いの貨物船伊吹丸がイカリをおろしたという急報がきた。それと浜辺へ押寄せる。船員にむしゃぶりついて抵抗。伊吹丸は一俵も積めずに逃げ出した。

その夜は晒屋川畔の米肥商、金川宗左衛門邸前につめかける。ガラス戸をかたつぱしからたたき割って引き揚げたのは、夜もかなりふけてからであった。

米騒動はこうして始まったのである。

暴動化——

そのころ、京都の民衆の生活も窮迫していた。米騒動当時の京都伏見町役場吏京都のばあい 員の平均月給は二三円で巡査は被服代、弁当代、臨時手当を含んで二二、三円ぐらゐの手取りがあるが、家族の多い者は生活が出来ず、会社員に転職をはじめ警察は欠員になやんだ。

京都市電の従業員が当局に請願書を送って、きかれなければストライキも止むを得ないと叫んでいるが、そのなかに「平均月収一八円、これに賞与一円、手当六円五〇銭を加えても二五円五〇銭内外であるのに、支出は米代一四円（一升四〇銭とみて三斗五升）、その他合計三一円で五円余の不

足を生ず」と書いている。

生活難から京都府下には不穏な空気がただよいはじめたが、当時の新聞の論調は、これを反映して、たとえば『日出新聞』の八月一〇日夕刊（生活難三）には

「こうなって来ると米屋程憎むべきもの、いや憎らしいものはない。（中略）何にもせよ米屋が赤ん坊の手をねじるような値上げをするのは否まれぬ。米屋は持米を四十幾銭に売らねば損をする」と云うのではない。ただ調子に乗せて上げて上げて米屋成金を夢みてるのだ。最も憎むべきは千石以上の米を抱えて売出さぬ米屋である。その悪鬼羅殺の如き奴が京都に四軒あるそうだ。其中一軒は出町辺にあるという噂もある。更に外米を一石に付五円四〇銭の其筋の補助を受けて買入れながら、之を京都倉庫にウンと預けて売出さず、暴利を貪らうと鷹の眼を光らして居るものが木屋町二条辺にあるという説がある。」

八月一日夕刊（生活難四）

「七〇円近く貰うようになった官吏も米の高値で生活に困って、越中辺の漁夫の^{かみ}連の一揆や柳原町の貧民の暴動などを聞くと、馬鹿な奴ちゃと云う観念よりも、無理はない尤もだ（中略）何となく同情し同時に共鳴する様な者も起ります。（中略）中には『何うだい一つ遣っ付けるかな』など、不穏の言葉さえ聞くに至った。」

『米騒動の研究』は京都の騒動の実情を、主として新聞報道によってくわしく述べている。

京都市の騒動は市内最大の部落（被差別民）柳原（東七条）ではじまった。当時の部落の戸数は約一六〇〇戸くらいであった。

「之と同時に東七条某湯屋で入浴中誰いとなしに、新聞でみると米屋襲撃をする米が安くなるという様なことから、『米屋を叩き壊せ』等と口々昂奮して此処にも一団二・三〇〇人の群集を作り、両団が期せずして同町の広場に集合し不穏の模様があつたから、七条署よりは赤尾警部補部下を随えて急遽出動、一同を鎮撫に努めた所が幸に七時半頃に一同解散したからヤレ安心と思う間もなく、同町の辻々には『米上りにはだんたい一五〇名ある故一三日せひ一の橋鴨川行がよし、ひる一時』『そうこあばれて米取出だんたい者の橋鴨川へあつまれ』という貼紙がはられ、それに刺激されて八時三〇分には又もや一団の暴徒は東七条巡查派出所（つい先日竣工してまだ巡查も詰め合さない）を血祭に上げよとばかり、一貫目余の大石を表戸になげつけて硝戸七枚を破り八時頃に……予て同町民怨嗟の的となつていた七条高瀬川下る沼田定次郎という白米の大商店へ押しかけ、表戸その他を破壊して荒狂った揚句、隊を三つにわけて各所を荒さんとするを、早くも聞付けた七条署員は稲川署長以下全員を非常召集して警戒に努め、再び鎮撫して警戒おさおさ怠りなかった。再度おさまれる暴徒は一〇時すぐる頃町の何処ともなくとうとう太鼓を打ち不穏の合図をなして同志の糾合に努めつつありしが、遂に午後一〇時半に至り群衆の勢は又もや沼田定次郎方の表戸を破って雪崩の如く押入らんとするを、佐藤巡查部長らは必死に此を支え、漸く一升につき五銭の値下を承認させて得心し、一同は凱歌をあげて同所を退き……」（『日出新聞』八・一二）

それより群衆は数隊にわかれて、沿道で多数の市民を加えながら、下京一帯の米屋を襲い、その数は七条署管内二〇、松原署管内八、堀川署管内四におよんだ。群衆は行くさきさきで戸をうちたたき、投石し、喊声（かん）あげて米屋をおびやかして、いずれも「白米一升三〇銭デ売リマス」という貼

紙を書かせ、目的を達すると「ばんざい」と叫んで次の目標に向かった。

あけて一日となると、この日は朝から全市は不穏な状況につつまれ、昨夜の柳原部落民の蜂起は、ことに市内に点在している被差別部落民の人心を動揺させた。一方市内各警察署も警戒体制をとり、とくに部落間の連絡を絶つため加茂川の各橋の両袂には一〇数名づつの警官を配置した。しかし夜にはいると、まず八時半田中村に暴徒蜂起し、九時半に至りては全市に至り一〇数か所、多きは千名少きは四、五〇名の一団、米穀商及倉庫を襲撃するに至り（前掲「米価問題に関する各府県紛擾状況」吉河「研究」一三三ページと同文、騒動に参加した民衆の総数は約二万といわれた『大阪毎日』八・一三）。これに対して官憲は前夜の方針を捨て「暴行を為すの嫌あるものは容赦なく引致する方針」（『大阪朝日』八・一二）で民衆に当たったが、多勢に無勢でほとんど手出しできなかった。そこで夜十一時ころ馬淵知事は伏見の第一六師団に対し出兵を要請した。これに応えて二〇〇名の歩兵と六三名の騎兵（うち五〇名は徒歩）が派遣され、田中、西陣、西三条方面に配置され鎮圧に当たった。このため民衆は各所で追い散らされて翌朝三時ころ全市はようやく平静に帰した。

新しい 京都の米騒動については、つぎのような資料もみつけた。

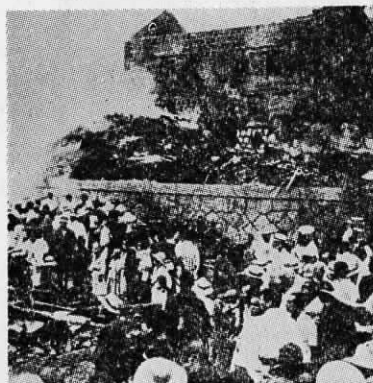
資料 この資料は昭和二年の弾圧下に発行されていた共産主義雑誌『戦旗』に出ているもので、京都の「奥甚」といえば労働、思想運動で知られていた奥村甚之助だが、京都米騒動の暴動を内部からみた手記として興味がある。

富山の米騒動は、新聞に出るとすぐ京都に飛火したが、京都は三面山でいわゆる「部落民」（被

差別部落民」が多かった。

「昔の特権階級どもは考えやがって、一カ所にまとめておけば暴動でもおこせば恐るべき力だから、少しずつ、分離して京都のすみずみに部落を設けやがった。それが今では逆に要所要所の市外の出口の要害の土地となっているのも皮肉だ。全国に知れている大きな部落東七条（全国水平社発祥地）東三条、西三条、鹿ヶ谷、鷹ヶ峰等に分散しているが、これらが連絡がつけば到底警察力ではおさえることができないのはわかりきっている。富山の米騒動の号外が出る時ぐやつらは非常召集をしゃがった。東七条の出口という出口は、警官どもが人垣をしゃがったが、奴らは抜け穴だけは知りさらさぬ。大通りばかりをサーベルで埋めやがった。

その間にこっそりと抜け穴から数十名勇敢なる者だが肩につるはし、×××、×××など手に手に×物をさげて出て行つた。まず第一に附近の米屋の表戸を××で××××として談判をはじめた。米を一升四十銭に下げろ、米屋へーとぬかしやがった。またの米屋は交番の前だったので



焼打ちされた岡山精米会社
(大正七年八月一三日)



米騒動の漫画
(岡本一平画)

巡査が五六匹いたが、平生の虎の威を借る勢はぬけてしまつて、また同志の殺気立ったのに辟易したのもあるうか『君おだやかにやってくれ給え、そりや米が下れば僕等も助かる訳だが』とぬかしやがった。それでも奴らは忠勤ぶつて警察へ電話をかけやがった。貨物自動車に犬を満載して来た。けれど、自動車の通れない細道ばかり疾風の如く走り、ついに二十丁からはなれた東三条との連絡がとれた同志は増加した。もう大丈夫京都全市の××力では及ばない。これから西三条、鷹ヶ峰、鹿ヶ谷との連絡がとれば、いかに奴らがさわいでもびりつくものではない。

京都府知事については警察力で及ばず、一六師団の軍隊の出動を乞いやがった。おれたちは、初めて××力なんて強そうに見えても、いくじのないものかをはっきり知った。一六師団の軍隊が来たが、歩兵だとみんな兄弟や土地の者ばかりだから、銃を後ろ向けに打つ恐れがあるから、他国らの集まりの砲兵だとか工兵だとかをよこしやがった。」

暴発の 富山県の漁夫町で口火をきつた米騒動は、またたくまに全国の都市、漁村、農村、深刻な波紋 村、工場、鉱山いたるところに勃発し、激烈深刻化したと『研究』『米騒動の研究』井上・渡辺編 は書いている。

八月九日、岡山市では市民が米価をつり上げた米穀取引所の仲買人を袋叩きにする事件がおこつた。九日には岡山市でも町内の米の他地域移出に反対して町民が米屋、役場に押し寄せて示威し、警察と対立した。その他の町村でもおなじ運動が行なわれている。

広島県でも米の移出反対の民衆示威が行なわれ、同じ日に香川県高松市の漁夫の妻女らが市役所

に救済を求めておしかけ、同県の他地域でも同じ事件が勃発している。

近畿地方では和歌山県で湯浅町の町民六〇〇が米の県外移出反対をさけんで役場にすわりこみをかけている。

兵庫県でも役場におしかける事件があった。

大都市では京都市のばあいについては、すでに述べたとおりで、名古屋市中でも鶴舞公園に集まった二万人の市民が市民大会をひらき、その後から騒動になり九日から一六日まで毎晩騒動がくり返えされた。

一日には大阪市中で大騒動勃発、一二日の夜の大阪は全国の米騒動中で最大の規模となったが軍隊によって鎮圧されている。

神戸では一日夜千人以上の市民の米安売り要求デモがおこり一二日の夜は数万人が動く大騒動となり鈴木商店、神戸新聞、神戸製鋼所等を焼打ちして、これも軍隊の出動によって結末をみている。

一日から騒動は東海、近畿、中国、四国の各地にいつせいに始まったが、一三日東京にも騒動がおこき一五日までつづいている。関東各地町村にもひろがった。

大正七年の米騒動は全く民衆の自発的な行動で、それも計画性はなく組織、指導というものはなかった。この騒動のはっきりした特徴は、どの事件も夕方または深夜におこり、翌朝まで終わっている。昼間は平穏で、夜になるとまた始まる。昼間は勤務や仕事につとめていた。したがって彼

らが結集できたのは夜しかない。これを見ても米騒動に計画性や統一の指導はなかったことが推測されると『研究』は書いている。わずかに二、三日の間に、全国の大中都市にいつせいに爆発して、まるで統一の指令でもあったようにみえるが、相互になんの連絡もなく、統一の指令などはなかった。各地の事件のうわさが新聞で急速にひろまったことによるのだ。

「社会主義者や無政府主義者の指導がありはしないかと、官憲は神経をとがらせていたが、それもなかった」『研究』一一八ページ

「大阪では大杉栄の系統のアナーキスト金味道明らが検挙されているが、彼らは万余人の群衆のなかで、率先してワッショワッショと連呼し、警戒の巡査をおし倒そうとしたものである。それ以上に指導とか計画したとかいうものではない。なお金味はその編集する「痛快新聞」の九月五日つけ紙上に、米騒動を讚美し……」『研究』一一八ページ

社会主義者、無政府主義者で検挙されたものは、全国を通じて、大阪三名、神戸、名古屋、広島、新潟で各々一名合計七名あるが、それらは騒動の群衆に参加したか、もしくは参加しないのに逮捕に來た警官に反抗したものだ。

指導がなかったから組織もなかった。ただ個々の蜂起や集会、または打ち壊わしのその場その場には、先頭に立って音頭をとる者が出てきたのは当然である。また、騒動は「今晚」または「明日」の何時にどこに集まれ、大会を開く、などのビラが貼り出され、その日時、その場所に群衆が集まり、そこから騒動が出るばあいが多かった。このばあいには、あきらかに呼びかけの発企者が

あるわけであるが、それだけのことで、貼り紙をした者が襲撃の順序方法をあらかじめ考えておくとか、群衆をリードする指揮者を作っておくとかということはなかったと見てよいと『研究』は書いている。

「しかし、民衆に政治的自覚が全然なかったのではない。政府が悪いという非難は、一般市民の中にもいたるところにあった」と『研究』は書いている。

政治意識があっても、突如たる暴動のほかに、民衆はそれを表現する手段がなかったのが当時の政治体制であった。選挙権もなく、また、言論、集会、結社の自由は極度に制限されていた。絶対主義の中央集権、官僚である県知事に対しては哀訴嘆願するか、もしくは暴力でふるえ上がらせるか、いずれかの手段をとる他はないというのが『研究』の所論である。

米騒動事件を担当した検事は「騒擾各地に蜂起するや、警察官吏には暴徒に同情又は恐怖して傍観的態度をとり、却って騒擾を拡大せしめたるもの絶無にあらず」と言っている（『研究』五卷六九ページ）。『研究』はいったん激化した騒動を警官だけの力によって制圧し得たところは数えるほどしかない、と書いている。警官は群衆の解散するのを待って、解散しかけたところを攻勢に出るか、軍隊の力をかりるかのいづれかであったようだ。担当検事は警察側が現場で検挙を行なうなどしたことが群衆の反感を挑発して、騒擾を激化させたことを語っている。実際、警察の行動を怒ったための派出所、警察署がおそわれた例はわかっているだけでも何十か所とある。

軍隊の出動はかなり大きい力を持っていたが、群衆はかならずしも出兵によっておとなしく退散

したわけではない。小倉市や静岡県清水の例のように、すでに事前に出兵しているにもかかわらず蜂起している。若松、長岡、東京、大阪、名古屋、神戸、岡山、広島、呉、門司の各市など出兵下二日間にわたって騒動がおこっている。

民衆は武器を持っていない。せいぜい石を投げるくらいのが多かった。それでも果敢に軍隊の警戒線を突破しようとするところもみられる。大阪では群衆は各所で警官、軍隊を包囲し、これに石を投げ、多数の負傷者を出した。ある場所では竹槍を持った群衆が兵隊をおそい、銃を略奪し、群衆と兵隊の組打ちが始まっている。

このような激しい衝突が一日三日の大阪市内では五か所もあった。この結果、軍隊だけでも負傷者が三〇名、民衆側に死者二名、重傷九名、軽傷三七〇名を出している。呉市でも民衆は衛兵隊の本部の置かれていた憲兵分隊を襲撃した。一日は九〇〇名の海兵隊を迎え撃ち、屋上から瓦を投げ、路上にタンスや雨戸などを積み、水兵に石を投げなどしている。民衆側で銃剣で突かれたものが二十数名、うち四名死亡、兵隊側も重傷二名、軽傷一六、七名出している。

米騒動の

影 響

向、有産階級に対する無産階級の対立のムードや思想、社会的公正への要求や生存権の主張、地主、富豪の味方をして無産者をかえりみない政府に対する不満、そのような意識があった。そうした思想的傾向は米騒動という全国的な運動を体験することで格段につよまり広がったが、民衆の威力が、民衆自身によって自覚され、政治家も知識人もそれを認識したということは、

米騒動以後の日本の社会的潮流の大変化として歴史的な意味を持っている。実に米騒動は一つの転機となった。社会一般に民衆の力が感ぜられたのである。

騒動の過程で民衆は警察というものが官僚専制の道具であつて、社会を保護するものではないという印象がつよめられたことも注目すべき事実であらう。

米騒動の翌年あたりから労働運動を先頭に農民運動、婦人運動、部落解放運動、学生運動が一斉に急速に発展し、その闘争性がつよめられた。米騒動は実に、このような社会運動、階級闘争の一斉発展のスプリング・ボードになったのである。

『研究』は、以上のような見解を述べている。